双子姫のカノン

小説 さかき傘
挿絵 きりさわときと

立ち読み版

序　章　ピアニッシモ・シンフォニア　006
第一章節　シャープ・ラプソディー　010
第二章節　司　059
第三章節　クレッシェンド・セレナーデ　071
第四章節　アリア　130
第五章節　デクレッシェンド・カプリチオ　142
第六章節　シャル　192
第七章節　フォルテッシモ・フィナーレ　206
終　章　グランディオーソ・シンフォニア　250

登場人物紹介

Characters

アリア

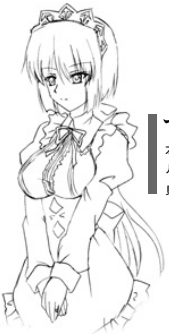
北欧の専制君主国家ソルティレージュの第一王女。銀髪おしとやかな性格で、国に伝わる伝説の曲『カノン』の習得に励んでいる。

シャル

ソルティレージュの第二王女。アリエスの双子の妹で、姉とは離れて育てられた金髪の少女。厳しい性格で剣の達人でもある。

メル

アリエスに仕える褐色肌の陽気なメイドで、彼女へ厚い忠誠心を持つ。日本の文化に強い興味を持ち、司にも興味津々。



マリオン

本国に夫を残したまま、アリエス、シャルティエの下で働く人妻メイド。一見貞淑だが欲求不満なところも?

寿司（ことぶき つかさ）

実家の土地をソルティレージュに買い上げられ行き場をなくした青年。結果としてアリエスたちの使用人として働くことに。

第一章節　シャープ・ラプソディー

「ダイジョーブよ。ニッポン人ヒトヅマ大好きでしょ。それに……マリオンも」
少女は滲んできたカウパーを舐めとり、人妻に移し飲ませながら。
「ダンナさん日本に来られなくてヨッキューフマンでしょ？　フフッ、いつも使ってるバイブと、ツカサのコレ。どっちが太い？　どっちが長い？」
「ぅう……はんっ」
ごつごつした血管の脈動が分かるのだろう、マリオンはカーッと顔を赤くする。目の前にある逞しくカサを開く雁首に、魅入られたよう深いエメラルド色の眼を濡らしていた。吐息が荒くなってきているのが陰毛をゆらされる司には分かる。
怪しげな催眠術のよう、メルは耳元で続けた。
「さわってて分かるでしょ、スゴくカタいの。メルも楽しみよ、こんなのアソコにいれたらどーなっちゃうかな？」
さらに腰を撫でていた手が、いつの間にかロングスカートに包まれたお尻へ移動していた。ムッチリした肉付きを掻き分けて中心をコネくり回す。肛門まで弄られて、熟した女ざかりの肢体はもうトロ火で煮込まれたよう赤くなっていた。
「ニホンのエッチマンガ見てると、よく『突く』って言うよ。どーゆー感じかな。『コスる』は知ってるけど。突くなんてこのカタいのじゃないとムリよ」
囁きに招かれるよう女の抒情的な細眉がハの字にゆがんだ。若いメルにはマネのできない人妻の、妖しい潤みを帯びた表情に、司は思わず息を呑む。

高級感漂うアンティークのデスクにメイド二人が折り重なるよう乗り上げた。
マリオンはまだ戸惑っているが抵抗しない。仰向けに寝かされ、上からメルが四つん這いで跨いだ。スカートの中に手を入れやすやす下着を奪う。自分の白いショーツもくるくる下ろしていき、プルンと丸いヒップを持ち上げながら、チーフの腿を抱えるので……。
「……うはぁ」
「ほらツカサ。準備OKネ、メルとマリオンにそのカタぁいのゴチソーするよ」
挑発的に腰をゆすってみせるメイド少女と、困惑しながらも大人しいメイド長。二人分の淫地がお試しあれとばかりに並べられる。
……改めてこれは夢なんじゃないかと思った。
メルの臀丘は眩いばかりに若く、理想的に上を向いている。服の上からも思った通り無駄な肉のないスレンダーで、一面セクシーなチョコレート色。腿の付け根から褐色なのに、中央に走ったクレバスの中身は色素が薄く赤いのが目を引く。
マリオンの身体は対照的に太ももといい尻肉といい蕩けそうな脂がむっちりしき詰まっている。つきたての餅のような肌質、そして色合いで、そのくせメルのすぐ下にきた裂け目は、似通った鮮紅色だった。
「そんなに見ないでくださいまし……。わ、私、まだ主人にしか見せたこと……ぁフン」
GかHカップはあるだろうゴムマリのような豊乳を、のしかかったメルが揉みしだいて

くるので、女はすすり泣くことしかできない。
「ほぉ〜らぁ、ツカサぁ、早くほしーよぉ」
「おう……」
男の昂奮も頂点に来ていた。エキゾティックで甘そうな尻を抱えながら机の上に膝をついて、紅く腫れた花弁に尖端を押しつける。
イタズラなメイドは最初のうち人を食ったような微笑を浮かべていたが、
「ンフフ……。……ぁ……、ぅ――？」
グリリと勃起が刺さりだすと、途端に顔から余裕が消えた。肉刀が窮屈な軟道をこじ開けていくのに合わせ細い背筋が仰け反っていく。
「うッ……あ、わ、なにこれ。わわわなにこれぇぇっ」
「メルのマ〇コすげーいいよ。外国人さんだからかな、味わったことない感じだわ」
粘膜にはいくらかの慣れがあり柔らかいのだが、絞りが半端でなく、幾重にもたたまれたヒダをくぐるのは一苦労だった。あまり濡らしていなかったせいで亀頭を引っかかれるのが痛いくらいだ。
だが摩擦で熱いシャフトがヌチヌチ肉擦れの音を起こすたび、メルのほうが追い詰められている。円らな目をさらにまん丸にして、スラリとした肢体が狂おしげにうねった。
「太ぉ……ていうか、硬いよぉっ。うわはっ、わぁあぅうっ」
これまで経験した異性に比べて勃起力が強く、締めても締めても融通が利かない自分勝

手な侵入者に、無理やり穴にピストンを送り込まれる。
「ふぃ……、ひぃぃん……。コレ、わぁは、はじめてらよぉ……」
一番深いところまで貫かれるころには、悲鳴は甘ったるい音色に転化していた。
「あへぁ……はふあン……♥　これ、コレしゅごいぃ……。かぁた……、カタいっ、のが、奥で広がってっ、グリグリ――きゃあぁふっ♥」
尖端で奥をつつくたび嬌声とともに左右の銀髪がふるつくのを眺めながら、司もピッタリ肉茎を包まれる連結感に息を荒げている。自然と腰使いが激しくなってきた。まだ濡れのあまい内部を擦ると亀頭がヒリヒリするが、初めて訪れた屋敷で、会ったばかりのメイドを射抜いているという異常性への興奮で腰が止まらない。
背中に密着してツインテールの片側へ鼻を近づけた。要望に気づいたメルは肩越しに顔を向けてくれる。肌より色素の薄い唇へぴとりと口をかぶせ、温かな唾液をねっとりかわしあった。小高い鼻先から甘い吐息がこぼれると、とろーっと膣奥で蜜の分泌が早まる。
「あ、あぁ……」
目の前で若い二人の交合を見せつけられ、マリオンが疼ききったため息をあげた。司が顔をあげると淡いグリーンの瞳と視線が重なる。
濡れた唇がヌメヌメしている。頭の焼けた司はメルにするのと同じ感覚で奪っていた。
「ムふ……、う、うぅぅんっ」
人妻は首をひねろうとするが、ずぶりと舌を差し込むとあっけなく抵抗をやめる。唾液

を流し込んでやれば鼻を鳴らして甘美なベーゼに応えさえしてきた。
「……マリオンさんも欲しくなってきた？」
M字に開いた両足が腰へ巻きついてくるので、男は自然と彼女を優先させたくなり肉棒を引いた。ヌトリと若いメイドのエキスにまみれたそれを、あられもなく露呈した中心部へあてがう。
「ンふ、マリオンも入れてもらうがいーよ。絶対ヤミツキよ」
ハーハーと肩を喘がせながら少女はエプロン越しの豊乳を鷲づかみにする。ねちっこく量感全体を転がし、自分のノーマルサイズとぶつけあった。
それだけで女の細眉は切なげにゆがむ。その色っぽさにたまらず司は砲身をさげていた。
「は……ぁあ、いけないわっ。私には、私には主人が――……ぁっ」
拒もうとする声は、血の気を滾らせた刀が身を裂いた瞬間に止まる。メルと同じくヒダが欝蒼としているが、掻き分ける必要はなく滑らかに侵入できた。……温度も湿度もメルよりずっと高いのだ。
「なんだ、マリオンさんのほうが楽しみにしてたんじゃないですか」
誘いこむような粘膜の具合に軽口を叩きつつ、甘美な肉を抉っていく。挑発的に締めつけてくるメルのそれとはちがう意味で、マリオンの園も積極的だった。ヒダの一枚一枚が突き込んだ剛杭へ甘えるよう擦り寄ってくるのだ。強引な侵入者を愛しむような反応。まるで胎道そのものが、オスに屈服しきっているようだった。

進めば進むほど、彼女もまた先ほどのメルのように目を見開いていく。生涯の貞操を誓った夫とは勝手がちがうのだろう。

「マリオン、どぉ？　全然ちがうでしょ？」

乳首を弄りながらニンマリ頬を緩めているメル。

「うぁあっ、ちが……うっ。ぜんぜんっ、主人のより太い、あぁぁ逞しい……」

「フフ、スゴさが分かるのコレからよ。すごくカタくて、入ってルだけでズット気持ちいいの。すぐにマリオンのココ、ツカサのちんちんのことしか考えられなくナルよ」

「こまるっ、困りますぅ……っ。私、主人が……ぁあン太いぃ♥」

眉をたわめながらも人妻の反応は凄まじい。そり身になって豊かな乳房をぷるんぷるん躍らせながら、もっと奥へとばかり下肢をせりだしてきた。

匂うくらい大人の色香を放つ美脚がキュとつま先を丸めながら腰へ巻きつく。一度火がついてしまえばメルよりよほど貪欲だった。司の腰が進むたび下半身全体が妖しくローリングして、巨砲が埋まりきるころには、清楚な美貌は恍惚となっていた。

「分かるマリオンさん？　全部入ったよ」

「は……ぁぐ。すぅ……ごいぃい、主人より頼もしいわ、すごく深いのぉ……」

顔を近づけていくと、向こうから舌を差し出してきた。しっとり甘い口腔をしゃぶってやれば高い鼻先からそれだけで射精欲を擦りあげるような嗚咽が溢れ、唾液を流し込めば嬉しそうに目を細めながら嚥下していく。

人妻をものの数秒で虜にした肉塊……メルが名残惜しそうにお尻をモジモジさせ、
「ね、ねぇツカサぁ。もう一回メルにもぉ」
ぶすっと頬を膨らませながら言った。
奉仕されたときからそうだが、このメイドさんにはなんとなく逆らいがたいものがあり、司は苦笑しながら腰を引こうとする。が……。
「あぁあ……。待って、抜かないで」
今度は夫人が濡れた声で哀訴してくる。
一応メルが先約だったのでいったんお別れして肉は引き抜いた。アフターケアは忘れず、赤く充血した牝弁へは指先を含ませてやる。物欲しげな秘孔を指二本で抉り、ヘソ側のGスポットをコリコリ探ってやると、肉感的な腰がたまらない感じで悶えた。
そのまま上に乗っかる褐色ヒップの谷間へ、赤黒い棒を突きたてる。
「ひゃあぅンっ、きたぁぁあっ、カタいの入って……あはっひ」
埋没にあわせて肛門までヒクつかせながら細い腰がうねり狂った。
チョコレート色の尻たぶをたっぷりと貫き、そしてまたお別れすると、今度は二本指で拡張した人妻の中へ。
「くぁひぃぃ……♥　い、イイぃ、ありがとぉございますぅ……」
ねっとりした感触を存分に味わった。そうしてまた、メルの肉を指でほぐし、入れやすいよう広げてヌプリと埋め込みなおす。

鶯の谷渡りというやつだ。今日会ったばかりの外人二人。それもとびきりの美女美少女にそんな不埒を働いていると思うと興奮もひとしおだった。

「ぁうっ、やぅっ！　ニふぃぃ……。ツカサぁあ、もぉらめぇぇっ」

「ンああ私も、私もぉっ。果てるぅっ、果ててしまうぅぅっ」

エプロンドレスからまろびでる乳房を擦りあわせ、二人の声が同時に限界まで高まる。

「ッ……うく」

引きずられるよう司もチリチリ駆ける射精感に飲みこまれた。

マリオンの中へめりこませたものをメルの中へ移そうと腰を引いたとき限界を感じて、半ばまで抜いたものをもう一度最奥まで戻す。

「〜〜〜〜ぁっ⁉　ぁああ……っく……っ。うぁあああああああっ」

抜けると思っていたものが戻ってきた驚きがまず彼女から頂点へ押し上げる。指に弄られるだけで下肢を引きつらせるほど敏感なスポットに、牡硬い杭がめりこんだ。夫との閨房でそんな声をだしたことはあるのだろうか。清楚な外見から想像もつかないケモノじみた咆哮をあげ、豊熟な総身が仰け反る。

「あゃ……っ、らめ……。あなたっ、あなたぁ……っ」

涎の溢れた肉厚な唇から、助けを求めるようか細い声がこぼれた。

いままさに迎えようとしている絶頂が自分のなにかを変えてしまうと本能的に感じたのだろう。しかし助けを求めた相手は遠い祖国におり、彼を思って夜泣きした身体は、皮肉

にもいま体内をこじ開けている相手に屈服の念を催させる。
「あぅぅすごい、すごいぃ……っ。こんなっ、初めてッ。……ああ、あなた、あなたごめんなさいぃ……。私、私っ……。あなた以外ので――」
飾り気のないシューズを履いたままの脚がつま先までピンと伸びた。射精感に打ち震え司が腰の動きを止めても、マリオン自身が腰をせりあげるので、抜き差しの加速は止まらない。コリコリとした子宮口が子種を求めるよう下りてきて亀頭に覆いかぶさった。
とどめとばかりグリッと回転を含めた突きで、迎えに来た子宮の肉を奥へ押し込みなおす司。波動は一気に女を貫き――。
「～～～ぁ――――♥」
――じゅぷ……。……じょじょっ、じょぉ～……。
陶酔の極致へ堕ちた人妻が、だらしなく口を開け白目を剥く。夫以外の剛杭に支配されたままの秘唇は愛しげに間男を咀嚼し続け、尿口からは潮とも失禁ともつかない白濁した汁がぴゅるぴゅる吹き上げた。
「っ……メル。行くぞ」
「ぁえっ、～～ふぁあっ！」
先輩メイドの凄艶なエクスタシーに見入っていたメルが悲鳴をあげる。司がもう幾ばくもない発射までのタイムラグに、腰を引いて硬い尖端をぬかるみへあてがってきたのだ。
「ひ……ンン……っ♥　ツカサぁ、もっと優しくっ。ぅやぁあン強すぎるよぉっ」

第六章節　シャル

どこまでも身分をわきまえぬ男だ。騎士であり、また明日には次期女王となるだろうこの私を茂みに引きずり込んで、身体を弄びながら唇を……あぁ、背中の手が後頭部に回されグイグイおさえてくる。や、やめろ、強引なのはダメなんだ。頭がクラクラして。

ほんの味見程度だったらしい、やつはすぐに手を離した。力の抜けた私はその手の中にヘタリこんでしまう。……まだ乳ぶさを掴まれたままだ。

「へへっ、ちょっと抜いてくれよ♪　こんなに硬くなってて仕事しにくいんだよ」

作業衣の前を開ける。びぃんっと弾かれるように、湯気が立つくらい蒸れた逸物が飛び出してきた。

「……う」

く……クソッ、屈辱だ。不細工なキノコに似たその形状が目に映った途端、子宮が火をつけたようにキュンとなった。分泌された蜜が肉層を下っていくのが分かる。

見ただけで下着にまで染みて……パブロフの犬ではないか。はしたない。

「ほら、触ってくれよシャル。ちょっと汗とかで汚いから気をつけろよ。いきなり入れずに、ちゃんと『にゅぷにゅぷ』するんだぞ」

「だっ、誰がするか！」

怒鳴ってやった。張り倒してやりたいが、ダメだ、まだ乳房を握られたままで思うよう動けない。しかもヤツは私の反応に対し、むしろ嬉しそうにニヤつくと、

「なるほど。まずはにゅぷにゅぷじゃなくて、パイズリからしてくれるわけか」

ぐいっとドレスの胸元をさげてきた。……ぐ。無駄に大きい私のものは、ポロンと情けないくらいあっけなくこぼれ出てしまう。
「相変わらずデカいよなー。よきかなよきかな」
「だまれ無礼者ッ！　いい加減に……ふぁっ」
カウパーを出してヌルンとした尖りが左房へ押しつけられた。その感触、熱さ、硬さだけで私は上ずった悲鳴をあげてしまう。しかも驚いている隙にヤツは、脚立に据えた自分の腰へ私の上体を載せてくる。パイズ……む、胸で挟むのにちょうどよい格好だ。
「ほら、挟んで、しっかり扱いてくれよ」
巨大なものを乳ぶさの間に固定してくる。
「〜〜〜……っ」
あ、熱い……。それに硬くて、ビクビク脈打ってる……。
においがここまで漂ってくる。ふぁああ、やめろ、嗅がせるな。頭が……。
どうして私は、私の身体は、これほどこの感触に耽溺しているのだ。触れただけで胸が騒ぐ。この頼もしいものが体内で暴れるときのことを思い出してしまう。それにヤツが私に欲情してくれているという証だと思うと……幸せでいっぱいになる。
「ほぉ〜らぁ♪　気持ちよくしてくれよ、な？　シャル」
「……」
――『シャル』。アリア以外にはこの男しか使わない私の愛称……。

「〜〜く」
し、仕方ない。力ずくで逃げようとして騒ぎになれば厄介だし、この男の執拗さは嫌と言うほど知っている。ここはとりあえず満足させるべきだ。一度果てさせればしつこくされまい。こうするのが一番賢いはずだ。仕方のないことなんだ……。
ムニュリと両房を左右から寄せて、硬肉を挟み潰した。
「うは♪　キタキタ、いー感じだぜシャル」
……うは……ぁ……♡　きたぁ……。
胸で、おっぱいで感じただけで、ぶるぶるぶるっと全身が震えてしまう。
熱ぅい……。
おっぱいまで、おっぱいまで熱くなる。蕩けそうだ。このおちんちんにじゅぽじゅぽ抉られるのを思い出してヴァギナがヌルヌルになってしまう。
おちんちん……、おちんちんすごい……。
「んは……。はぁ……」
自然とおっぱいをゆすりたくっていた。挟んだものがビクンと脈打つたび、私まで腰が跳ねそうになる。
雁太の形状を感じたくて皮膚が、谷間の神経が敏感になっていった。時おり乳首がコリッと硬質に擦れる感じがたまらない。
私のおっぱいはいやらしいくらい大きいが、おちんちんはもっと大きくて完全には包み

きれない。根元のほうをぐりぐりすると喉のところまで真っ赤に焼けた尖端が来る。
巨大な亀頭……。これが子宮を打つ感じがたまらないんだ……。
「っ、……うぅっ、う――」
触ってもいないのに膣の奥から汁を搾りとられている気分。ひだひだがうねってエキスを分泌しては、どんどん外へ送り出してくる。……もう下着がぐしょぐしょだ。風のあたる腿が冷たい。内腿まで垂れてきてる。
ああ……落ち着かない。なんていうか、満たされない。おっぱいはこんなに気持ちいいのに、他が物足りない。ウズウズして仕方ない。
満たして欲しい。身体の奥まで、この熱いもので……。
「咥えたくなってきたかな？」
「――っ！」
からかい混じりのヤツの言葉で正気に戻った。
な、なにを考えているのだ私は。無意識のうちに亀頭へ寄せ、舌なめずりして湿らせていた唇を、慌てて離す。
「したいならいつでもいいぜ。たっぷり『にゅぷにゅぷ』しな」
「ふっ、ふざけるな……」
怒鳴ってやりたかったが、いつの間にか大量に分泌していた唾液が喉に絡んで、大声を出せなかった。

誰が――誰が舐めたりするものか。そんないやらしい真似、自分から……。
いまは面倒を省くためおっぱ……胸を使わせてやっているだけだ。それだけなんだ。
「ま、パイズリが好きならそれでもいいけど」
ニッと笑って頭を撫でてくるコトブキ。
「乳だけでも充分気持ちいいよ。ありがとなシャル」
「ぁふ……」
～～や、やめろ。頭を撫でるな。弱いんだ。子供のころ誰もそんなことしてくれなかったから……。あぁあ、よせ、そんなに優しい目でこっちを見るな。
見惚れてしまう。やつの黒い瞳から目がそらせない。
もっとヤツが感じたくなる。おっぱいの間のものが、この太くて熱くて硬いのが、たまらなく美味しそう思えてくる。
抗え。絶対に流されるな。私は咥えたくなどない！
……く、口に含んでにゅぷにゅぷして、「上手いぞ」って頭をナデナデしてもらうのも。乱暴にぐぽぐぽイラマチオされるのも……きらい、大きらいだ……。
「へへ。もうすっかりマゾ顔になってきたな。ほらご主人様って言ってみな」
マゾ顔？　いい加減にしろ！　この私をどこまで貶めれば気がすむのだ。死んでも言うものかそんな屈辱的な――。
「……ご主人……さまぁ♡」

ぐ……。

ち、ちがうッ。いまのはよそ事に気をとられて間違えただけだ。あんまり逞しいから、この太くて硬いものが入ってきたときのこと想像して……。

しっかりしろシャルティエ・ル・メディン・ソルティレージュ・イスタ！　お前は誇り高きソルティレージュ王家の血を継ぐ者であり、騎士院より称号を与えられた栄誉あるナイトなのだ。下卑な劣情に負けてどうする！　騎士が最も尊ぶべきは剣の腕でも頭の冴えでもない、己が浅ましい精神を律する心の――あ、おツユ。

尿口からプクリと顔を出した透明な雫。反射的に舐めとっていた。

はぅ……。

……美味しい♡

目で訴えるとやつは……ご主人さまは、「どうぞ」とばかり頬を撫でてくれる。私は幸せに打ち震えながら、大きなおちんちんを口いっぱいに咥え込んだ。

ふ、太い。顎が外れそうで。それに硬い。生臭くて、熱くて、

「んぐ……。んふゅうぅ……♡　あぁん、美味しい、ステキですご主人さま」

唇の端がチリチリする。息が苦しいし、大口あけすぎてすぐに顎がだるくなる。

でも……幸せ♡　こんなに美味しいおちんちん『にゅぷにゅぷ』できて。

シャルみたいなナマイキ奴隷にも、ご主人さまはこんなにおちんちんを大きくしてくださる。もう我慢できない……。ツバでとろとろになっていた口の中で、熱いのへいっぱい

に舌を絡めた。
先っちょのほうが熱めで、根元のほうは血管でボコボコしてる。……あ♡　ココ、雁首って言うんだっけ？　ちょっとくびれてる部分。ココがいつもヴァギナの入り口や子宮の辺りに引っかかって、気が遠くなるくらい気持ちよくしてくれるんだ。感謝をこめてツバが染み込むくらい丹念に舐めた。
「んぷふ……。うぅん、くふぅうン……」
もっと逞しくなるように、裏筋から先っちょの切れ目までぬらぬら擦りあげる。根元のほうは唇で強めに食んで、きゅむきゅむ扱きあげる。
はぅう……大きくて立派なおちんちん。おかしいな、ご奉仕してるはずなのに私のほうが気持ちよくなっちゃう。咥えてるだけで……もう……♡
「アリアと一緒でいつの間にかおしゃぶり好きになったな」
「だってぇ、ご主人さまのおちんちん、大好きなんです」
「はは。双子なのに趣向がちがうんだよな。アリアは『にゅぷにゅぷ』好きで……」
ぁ……。ご主人さまの手が頭の後ろにかかった。
「シャルはこっちが好きなんだよな」
あは♡　来る、シャルが『にゅぷにゅぷ』より好きな、『ぐぽぐぽ』してくださる♡
じゅぽっと乱暴に頭を引き寄せられた。咥えたままの頭を道具のように前後される。
「むふぅ……っ、ぅフんっ。うふぅンっ」

く、苦しい。喉の奥にあたる。鼻にツバが逆流する。
でも、でも幸せ……。こうやってお口をぐぽぐぽ犯されてると、ご主人さまの快楽の道具になった気分。それがすごく幸せ♡
お返ししなくちゃ。唇をできるかぎり締め、リズムにあわせて舌も長く伸ばした。いまの私はご主人さまの道具だ。ご主人さまに気持ちよくなっていただくことだけ考えるんだ。
っ、口の中でびくってなった。射精が近い。
ご主人さまは笑いながら乱暴にされるたびたっぷんたっぷんやらしく弾むシャルのおっぱいを握りしめてくる。
ちょっと痛い……。けどもうじきミルク飲ませてくださると思うと、痛いのも気持ちよくなる。ううん、ちょうど気持ちよくなる力加減でおっぱいをイジメてくださる。
「んんふっ、くふぅ、あふぅんン……♡」
抜き差しされるときにいやらしい声がもれてしまう。それくらい私は、ひたすらご主人さまの精を吸いとることに没入していた。
「うぁく……っ。ははっ、出そう――だ……っ」
はぅ……。もっとおしゃぶりしたいのに。残念だけど、私もヴァギナがジンジンして我慢できない。太くなってきたものをめいっぱい飲みこんだ。くびれた部分に舌を絡めて首を上下に振りたくる。舌で雁肉を、唇で竿を、扱いて擦って吸いたてる。
ください。ご主人さま、シャルのエッチなお口にいっぱい注いでください。シャルがご

主人さまの奴隷だって証を……♡

「っ――」

限界まで太くなった雁が喉につかえた。い、息が詰まる。でも――。

――ぶちゅるるっ！　びゅっ！　びゅるっ！　びゅるるるっ！

「～～っっ」

……あふ♡♡♡

すごい量の熱い粘りが喉に直接吐きかけられる。私は乳房を抱えた両手にぎゅっと力をこめ、お尻をピクピク跳ねさせていた。ご主人さまの愛が喉に絡む。その感触だけで頭が真っ白になる。それだけじゃない、舌の上に残る、イガイガするしょっぱさ。咽せるような匂いが、鈍いエクスタシーを身体に残留させ続ける。

……この国へ来てよかった。こんなにステキなご主人さまに出会えて。ドロドロのエキスが喉を通るたび、膨れ上がってちっとも冷めない絶頂感に焼かれながら思った。

この国での生活は、明日の式典で終わってしまうけれど……。

あれ？　でも、

式典が終わったら……。ご主人さま、どうするんだろ？

第七章節　フォルテッシモ・フィナーレ

カールする癖のあるブロンドの髪を撫でた。
こちらはドレスの前がはだけるだけでなく、スリーブが外れ、胸どころかおへその辺りまでが覗いている。そんな乳丘を鷲づかみにしながら、
「可愛い子……。先に司さんを独り占めしてしまってごめんなさい。けれどお姉ちゃんが代わりに、負けないくらい愛してあげますからね」
「ふぁっ！　……は、ぁゅうぅ。あ、アリアぁ、恥ずかしい」
釣り鐘型の元気のいい美乳をこねられ、シャルティエはたまらずお姉さんの身体へすがった。司の顔面をもちもちのお尻で潰しながら抱きつく。自然とそっくりな美貌が間近で見つめあうことになった。
温かく微笑む姉に、感極まったよう自分から唇を重ねる。
「っう……」
その途端、蜜部が温かみを増したのを感じ、司は痺れる思いで腰を跳ねさせた。目の前にある美麗な太ももの奥では幼い花園がぴくぴく反応している。外唇を左右に広げれば、中の複雑な花弁がよじれてトローっと粘っこい蜜が垂れてきた。
「こんなトコも双子、か」
約束通り間を取り持つ役に徹しようと、姉君の乗っかる腰をゆすりながら、物欲しげな坩堝へ中指を含ませる。
「「うぁふっ、ひゃぁうんっ♡」」

あわせたようなタイミングで、まったく同じ悲鳴をあげる二人。顔と股間に跨がる二つの下半身が睦まじくうねり、美尻が妖しく上下左右に跳ねた。
「ひぁあぅ……っ。ンもう司さんたら、いつもより大きくしていますのね」
野太い雁首がグリリとGスポットにはまり、細面を優艶に赤らめたアリエスが呟く。キュッと折れ曲がった眉には悩ましい官能美と、ほんの少しの嫉妬が感じられた。
「ははっ、でもアリアだってシャルとキスしてここ熱くしてるだろ？」
ぐいっと濡れた粘膜に腰をぶつける司。
「きゃぅうンッ。そ、そうですわ。シャルも一緒に愛せると思うと……はぁう♡」
浮気を誤魔化すため男の腰使いが一気に本格化するので、アリアも急速に高まらされた。巨棒が暴れ、釣り針の返しのようなカリがひだひだを容赦なく抉る。
同時に妹を追い詰める中指も、釣り針のように折り曲げて内地を引っかくので……。
「ぁあああっひっ！　アリあッ……。きゅうぅぅ私、わたしもう……」
「いいのよシャル、もっと可愛いお顔を見せて。……っン、わ、わたくしも……」
相乗効果のように興奮を高めあう双子姫。この二人に仲直りを超えた絆を作ろうと司は、さらに腰と指を荒く蠢かせる。甘い嗚咽のデュオを、極限まで響かせるために。
「うぁ……ひぃぃぃぅ」
つい先ほど一国を束ねる身となった女王も、淫靡な摩擦を送り込んでくる巨楔の上下動にはとても理性を保てなかった。汗でほつれた髪をかきあげながら、くびれきった腰を回

して濃密なピストンを受けとめる。男と呼吸をあわせ快楽を擦りあうたびに、ストッキングを吊るガーターが揺らめき、白磁の肌がなまめかしいピンクで染まっていった。
「はくぅ……っ、しゃ、シャル、司さぁん……っ。きゃああんふかいっ、深いですぅっ」
口を吸う妹からの求愛も情熱的で、腰から力が抜けてしまう。たっぷりの蜜を浴びてとろとろな肉路が極限まで広げられた。子宮が持ち上がる衝撃に蜂腰がバウンドする。カールした銀髪がはらりと揺れた。
「はぅうアリアぁ……はなしちゃいやぁ、もっと、もっとキスしてぇ」
妹を支えていられなくなったアリアを、今度はシャルが捕まえる。ぐにりと二種類のバストが重なってどちらも潰れあう。膣園では司の指が執拗に暴れており、理性がすっかり麻痺したようだった。時に柔らかく時に尖ってスクリューさせる舌で、姉の口腔をしゃぶりぬく。いつの間にか姉妹で攻受が逆転していた。
「うぁあんいやだ、わたくし、シャルと司さんにっ、おま○こイカされてしまうぅ……」
極太の怒張で肉を抉られる愉悦は、妹の濃厚な舌戯に口を、存在感のあるバストに乳肉を転がされていると、激烈に跳ねあがって全身を焼く。
真珠色の歯を覗かせて頂点へ昇っていくアリエス。焼印でも押されるようにオスの熱で子宮を押し上げられながら、ずっと求めていた半身と口付けを、愛の儀式をかわす。身体が中と外から甘美な幸せに包まれていた。膣肉を広げられる喜悦は、もう快感という次元とは少しちがっている気がする。浅いオルガスムスをずっと繰り返している気がする。

「へへっ。じゃあお先にアリアだけでもイカせますか。そらそらっ、大好きなのをご馳走してやるからな♪」
「はっ、はいっ、ありがとう……ございますぅ……っ」
そしていままた激烈なエクスタシーを約束するエキスが注がれんとしている。肉柱がずぶずぶ上下するのにあわせ、あどけない肢体が期待でクネクネと悶えた。上気した頬を蕩かす実姉のあまりの淫靡さにシャルが目を見開いている。
「あぁっ、シャル、分かる？　見てて。お姉ちゃん、お姉ちゃんイクの……。ふぁあ司さんのっ、司さんのびゅーってされてっ、もうおま〇こイッちゃうの……」
対面座位が好みなせいか、絶頂を覚えだすと反射的にすがるものを求め、目の前の妹をかき抱くアリエス。普段の高貴さから想像もつかない淫猥な蕩け顔で、狂おしく乳肉をこすりあわせる。長い脚をM字に持ち上げながらヒクンヒクン痙攣させる腰つきは、新たな女王の名から想像もつかない、妖婦のそれだった。
「あ、ああ……」
姉の淫らすぎる姿に気圧されたようになりながらも、ぬぷぬぷと甘美な舌で口腔を責められ、シャルもまた含まされた男の指へ膣肉を擦りつけながら、頂点へと引きずり込まれていく。
「はぁんっ、ねえ、司さんっ。お願いです、一緒に。一緒にイッてください。〜〜くぅぅン熱いので、司さんの熱いのでおま〇こイカせてくださぁいっ」

「分かってるって。ほらほら出すぜ――」
狂おしく疼く膣粘膜へ一気に引き金を絞る司。
――びゅくくっ！　びゅるるるっ！　どぶくるるるっ！　びゅくちっ！
「はぁあああああ……っ♡」
どんな媚薬よりもオルガスムスを招く魔法の粘液が、子宮の真下でふきだした。そっくりそのまま官能の中枢へ注ぎ込まれアリエスはたちまち喜悦の渦に飲みこまれる。
淫らにくねるか細い腰と、妖しくピクつく子壺の反応を楽しみながら、司は、
「ぁ……、ぅあ……」
姉と同じくエクスタシーを迎えてしまったシャルの姿に、小さくほくそ笑んだ。
目の前では白いお尻が揺れており、
その中央では幼いアヌスが、最初触られながら放っておかれて覚えた絶頂感に、戸惑うように不満がるように、ひくんひくんと痙攣を起こしていた。

★　☆

アリアが離れたあともシャルとのシックスナインは解かなかった。妹姫は恥ずかしげに甘え泣きながら、姉の蜜がたっぷり乗った怒張を咥えている。うっとりと頬を窄めながら吸いあげ、興奮が押さえきれないようコルセットドレスから形をゆがめてはみだした乳たぶを、プルンプルン悩ましくゆすっていた。

司は顔を跨ぐ両足の間から果汁を絞りとりつつ、攻めのシフトを裏門へ移している。少女自身が気づかないうちに肛肉は指を二本やすやすと咥えるほどふやかされていた。括約筋をねっとり擦られるとき、小高い鼻先からは媚を含んだ音色さえもれる。

緊張に強ばっては淡褐色に染まり、また力が抜けて濃桜色まで緩む上品な肛門。弄られすぎて括約筋が麻痺してきたのか、ヌメヌメと恥ずかしい腸液がもれてしまっていた。イタズラ混じりに盛り上がった周囲へ人差し指の腹を添え、くすぐるようにくるくる回してやると、肉皺が痙攣してかぽっと口が開いてしまう。そうして腸壁がどんな色をしているか見られるたびに、マゾヒズムが疼くのか少女は野太い男器を喉奥まで飲みこむ。

姫騎士の腸肉を覗きこむのは司だけではなかった。小さな手のひらが、優しく臀肉をタッチしている。グローブやストッキングを残してドレスを脱ぎ、あどけない天使の裸体をあらわにしたアリアが、ぽーっとした顔で妹の愛撫に参加していた。

司の提案で、ショーツの代わりに最近メルを何度も泣かせた皮製のパンツを履いている。形状はチープながら十五センチ強と長く、ちゃんとカリも刻まれた、双頭ディルドーのついた品だ。内側にも七センチほど突き出ている木棒が、ザーメンまみれの膣地へめりこんでおり、落ち着かなそうに腰をモジモジさせている。

パーティでのダンス中、シャルとの仲直りを取り持って欲しいとアリアに懇願され、真っ先に思いついたのがこの方法だった。姉妹に物理的な『絆』を作る。アリアとしてもわずかな背徳を除けば愛しい相手を気持ちよくしてあげることに抵抗はなく、二人の意見は

すぐにまとまった。……シャルにはまだ言っていないが。
「さて、それじゃあアリア」
ニンマリとサディスティックに笑う司。人差し指と中指に加え、薬指まで可憐な直腸に差し込んだ。
「ぁンん……」
熱くなった括約筋が開き、ジクジク疼く肛門の奥深くが撫でられる感触に、うっとりしてしまうシャルティエ。そそりたつ肉塊を咥えるのに夢中で、男と姉の悪巧みを聞いていないようだった。それをいいことにアリアへ目配せする司。
「もうゆるゆるに開いちゃってるぜ。焦らされると辛いのはアリアも知ってるだろ？」
「……はい」
妹の秘所や身体の中身を『見る』という、ある意味キス以上に恥ずかしい行為に頬を染めていたアリアが、言われるまま生やした木製の男根を掴む。
「シャル、……んふ、こんなところまで可愛いわ」
妹を愛せる。男女の性別を忘れた悦びに、アリエスは妖しく目を細めた。逆端を飲みこんだ膣道が反応し、ディルドーがまるで本物のようにビクンと嘶く。
ぽんやりして姉がいかがわしい道具を装着したことすら気づかなかったシャルティエだが、大きめな臀肉が小さな手に左右へこじ開けられ、肩越しにこちらを向いた。ちょうどほころびきって沼のようにヌメったピンク色の蕾へ、木棒の尖端があてがわれたところだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ http://ktcom.jp/ 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!